古書販売目録にみる
昭和期最大の入札会

―富岡鉄斎・謙蔵コレクション―

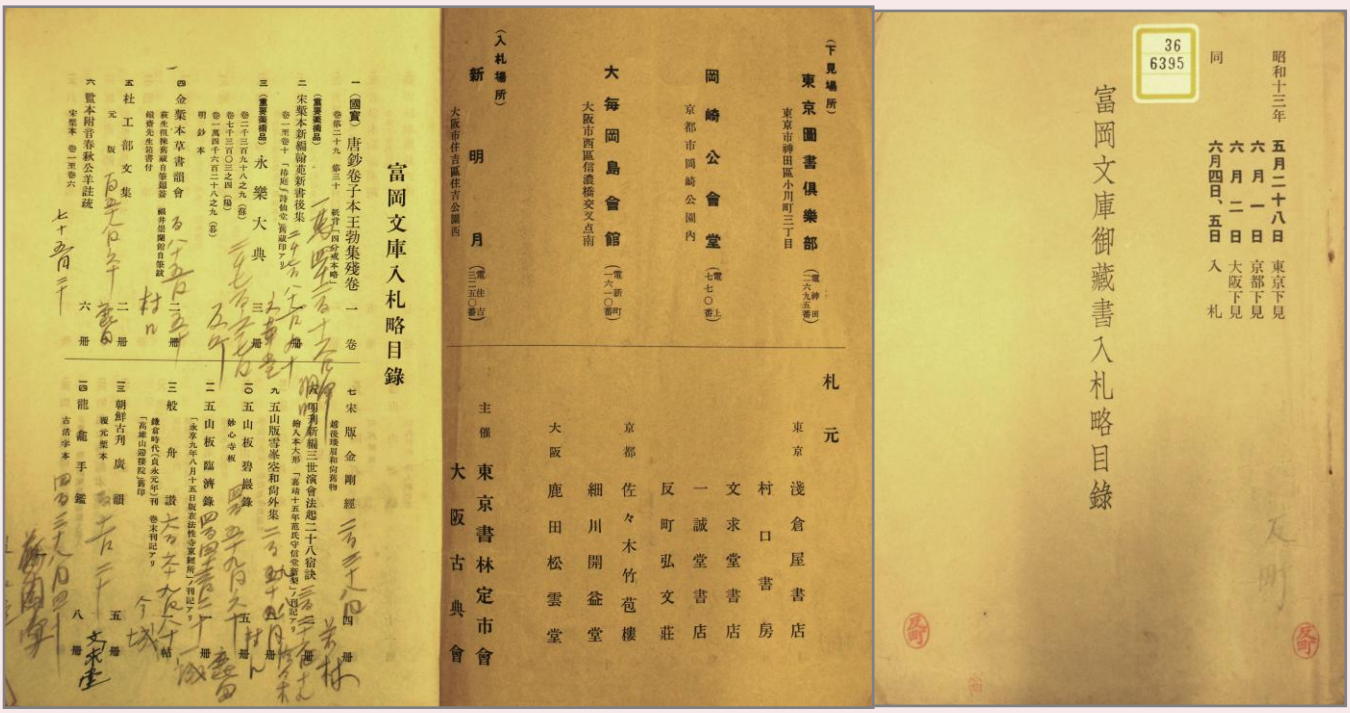
はじめに

富岡文庫は、南宗画の大家・富岡鉄斎（てっさい）と令息・謙蔵（けんぞう）の2代、70年間の大収集です。二人が世を去って十数年の後、富岡文庫の入札会が昭和13、14年の二回にわたって行われました。

この入札会は国宝や多数の重要美術品が出品され、戦後を含めても最高最大規模で行われたことが今に伝えられています。

本展示では、千代田図書館蔵「古書販売目録コレクション」より富岡文庫入札会に関する資料を紹介します。豪華な入札目録や過去最高の落札額を記録した値段表を一見するだけでも富岡文庫の特異性、入札会の景気の良さがうかがえます。

札元・鹿田松雲堂（しかたしょううんどう）の演出による画期的な入札会の様子をお楽しみください。



「富岡文庫御蔵書入札略目録」

（東京書林定市会・大阪古典会、昭和 13(1938)年）

この入札会を束ねた鹿田松雲堂は、東京の浅倉屋書店をはじめとする三都の実力のある古書店を札元に選び、下見会を三都で開催する等、これまでの入札会では行なわれていなかった手法をいくつも取り入れ、富岡文庫入札会を開催しました。

千代田図書館所蔵「古書販売目録コレクション」【入札会－36－6395】

富岡文庫の成り立ち　―鉄斎・謙蔵の収集癖

富岡文庫は、富岡鉄斎と令息・謙蔵二人のコレクションから成ります。

富岡鉄斎(1836～1924)は、神道、儒教をはじめ、あらゆる学問に通じた南宗画の大家でした。その収書は、神道をはじめ、国史・有職・法制・考古・地理・上代中世の文学・絵画から中国の詩文書・帯図本(絵入本)の類に至るまで、広汎にわたりました。

令息謙蔵(1871～1918)は、考古学者として京都大学の講師をつとめつつ、鉄斎の秘書として事務全般を担いました。謙蔵も父の収集癖を受け継ぎ、父の資力を背景に、専門とする金石拓本類から中国の経史子集(けいししゅう)全般に渡って貴重な書物を収集しました。研究者としても『古鏡の研究』という著作があります。

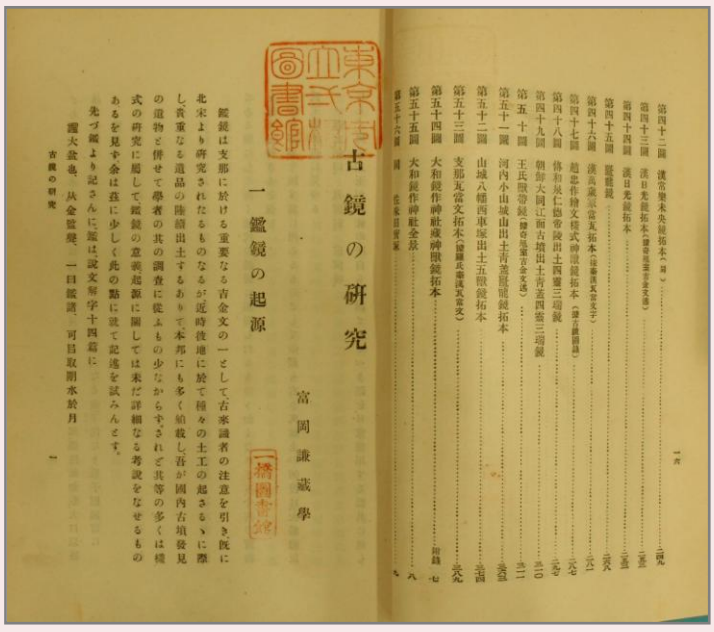
父子ともに愛書家でしたが、蔵書の扱い方は全く対照的でした。鉄斎は書物に蔵書印や奥書など手を入れることを好みました。古書店・弘文荘を営んだ反町茂雄は「これほど所蔵者の書入れの多い収集は見た事がありません」と語っています(反町茂雄『一古書肆の思い出』第二巻)。一方の謙蔵は、書物に一字の書入れもせず、必ず手を洗って開き、皺一つ付けないようにするほど几帳面だったといいます。

「思文閣墨蹟資料目録　第 200 号」

(思文閣、平成元(1989)年)

南宗画とは、水墨による柔らかい描線と自然な感興が特色とする中国絵画の系統の一つです。
鉄斎の画は老いるほどに輝きを増していき、80 歳にしてその芸術を開花させました。鉄斎の絵は現在でも世界に広く認められていますが、彼自身は「わしの絵を見るには、賛を読んでくれ」と言い、単に画家としてではなく、文人としての矜持を持っていたと伝えられています。

千代田図書館所蔵
「古書販売目録コレクション」
【書店別1－70－2014】



『古鏡の研究』

富岡謙蔵著／丸善／大正 9(1920)年
【資料番号:101156560、請求記号:202.5ト3301】

富岡謙蔵(号:桃華)による 4 世紀の古墳等で発見された三角縁神獣鏡(さんかくぶちしんじゅうきょう)※の研究書です。前書きの喜田貞吉「「古鏡の研究」の発行を聞きて」には、「君は実に卓越せる読書力を以って、多数の古書を読破せられたりしのみならず、他の容易に得難き書籍をも、財を吝まず購読せられて、常に新知識を得るに怠り給はざりき」とあり、謙蔵の古書収集癖は周囲からも認められていたことがわかります。

※三角縁神獣鏡とは、縁の断面形が突出して三角形をなすのを特徴とし、神像や獣形などを半肉彫りで表現した鏡のことである。

札元・鹿田松雲堂と鉄斎翁

富岡文庫入札会三都札元

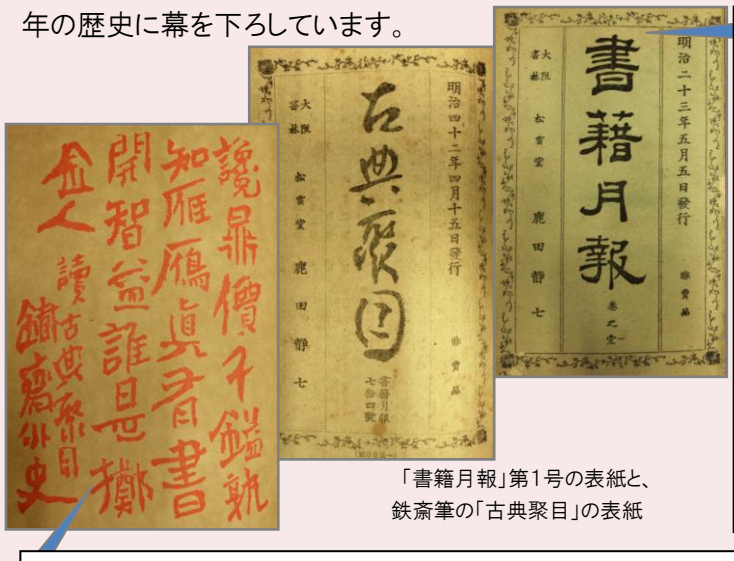
大阪	鹿田松雲堂
京都	佐々木竹苞楼
	細川開益堂
東京	浅倉屋書店
	村口書房
	文求堂書店
	一誠堂書店
	反町弘文荘

昭和13年、富岡文庫は鉄斎・謙蔵の遺族より、大阪の古書店・鹿田松雲堂に委ねられました。鹿田松雲堂の第 4 代静七（名・文一郎）は、東京・京都・大阪三都指折りの札元を集め、入札会の全権を担いました。

鹿田松雲堂は弘化元（1844）年に創業しました。2代静七の代には、明治23（1890）年5月、日本初といわれる古典籍の販売目録「書籍月報」を発行しています。

鹿田松雲堂と鉄斎との間には三代にわたる深い由縁がありました。2代静七の号「古丼（こたん）」は、鉄斎が名付けたそうです。また、明治42（1909）年に「書籍月報」第74号から「古典聚目（こてんしゅうもく）」の名に改めた際、鉄斎がその題簽（だいせん）を書いています。さらに、大正14（1925）年に発行された記念すべき第100号には、前年に逝去した鉄斎が生前に描いた古丼の肖像画、ならびに100号を前に鉄斎が送っていた手簡の写真が掲載されました。

富岡文庫入札会の後、鹿田松雲堂は 5 代章太郎まで続きましたが、昭和24（1949）年に廃業し、100余年の歴史に幕を下ろしています。



「書籍月報」第1号の表紙と、
鉄斎筆の「古典聚目」の表紙

「書籍月報 第1号」
（鹿田松雲堂、明治 23(1890)年）

古書販売目録とは、古書店が販売商品を紹介するために発行するカタログです。「書籍月報」第1号の巻頭には、「百芸ノ道を明（あき）ラメントスレハソレ豈（あに）古典ヲ棄テテ何（いず）レニカ之（これ）ヲモトメン（あらゆる芸の道を究めようとするのに、古典以外に参考とするようなものが果たしてあるだろうか）」と記されており、単なる通信カタログではなく、洋学を重視する当時の風潮を危惧し、古典籍の重要性を訴えるために発行したものでした。

千代田図書館所蔵「古書販売目録コレクション」
【書店別1－57－1741】

「古典聚目 第 74 号」（鹿田松雲堂、明治 42(1909)年）

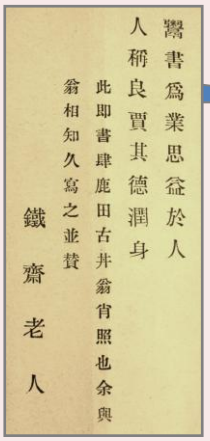
これまでの「書籍月報」から「古典聚目」に改題した第 74 号には、鉄斎が寄せた漢詩が赤字で掲載されました。鉄斎画には必ず賛文が付され、その書体は画や詩文に応じて変えられていたと言われますが、「古典聚目」の題字とこの詩からも、鉄斎の書の使い分けをみることができます。

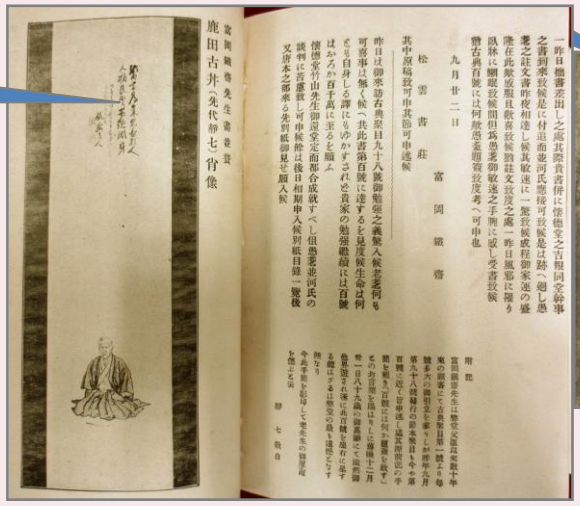
千代田図書館所蔵「古書販売目録コレクション」【書店別1－59－1747】

「古典聚目 第100 号」（鹿田松雲堂、大正 14(1925)年）

100 号に掲載された鉄斎手簡の印字と鉄斎筆の二代目古丼の肖像画

千代田図書館所蔵「古書販売目録コレクション」【書店別1－60－1752】





鉄斎が鹿田松雲堂に送った手簡
「古典聚目 第百号発刊について」

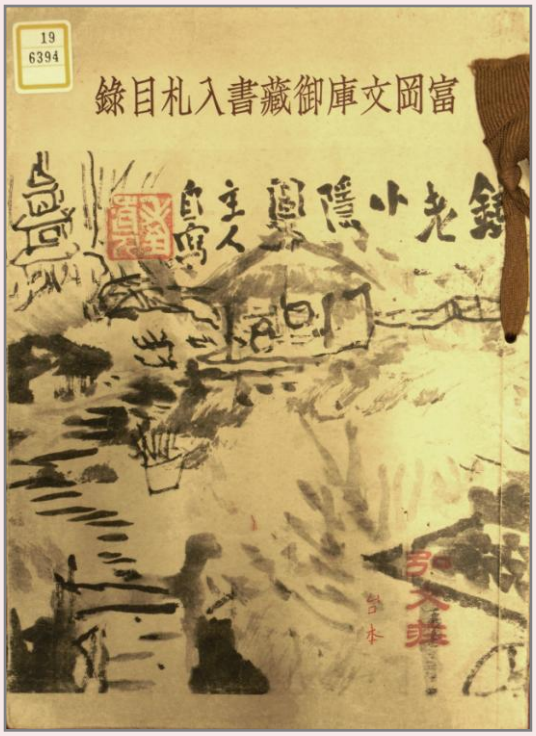
第1回入札会　―画期的な入札会

富岡文庫入札会は、今までに例を見ない手法・特色により、画期的な入札会となりました。有名な富岡鉄斎の蔵書入札会とあって、新聞などメディアにも大きく取り上げられました。

第1回目は、昭和13(1938)年5月28日より、東京・京都・大阪の各会場で順に下見会を行い、入札会は6月4日、5日の2日にわたって開催されました。会場は大阪市の新明月(住吉公園内の料亭)でした。第1回の出品物は目録掲載点数646点。鉄斎文庫本を中心に、桃華(とうか)(謙蔵)文庫本の若干を配したものだったようです。

富岡文庫入札会の特色

- 札元に３都一流の古書店
- ２回にわたる入札会
- 下見会の３都開催
- 鉄斎画入り豪華目録
- 国宝・重要美術品の出品



「富岡文庫御蔵書入札目録」

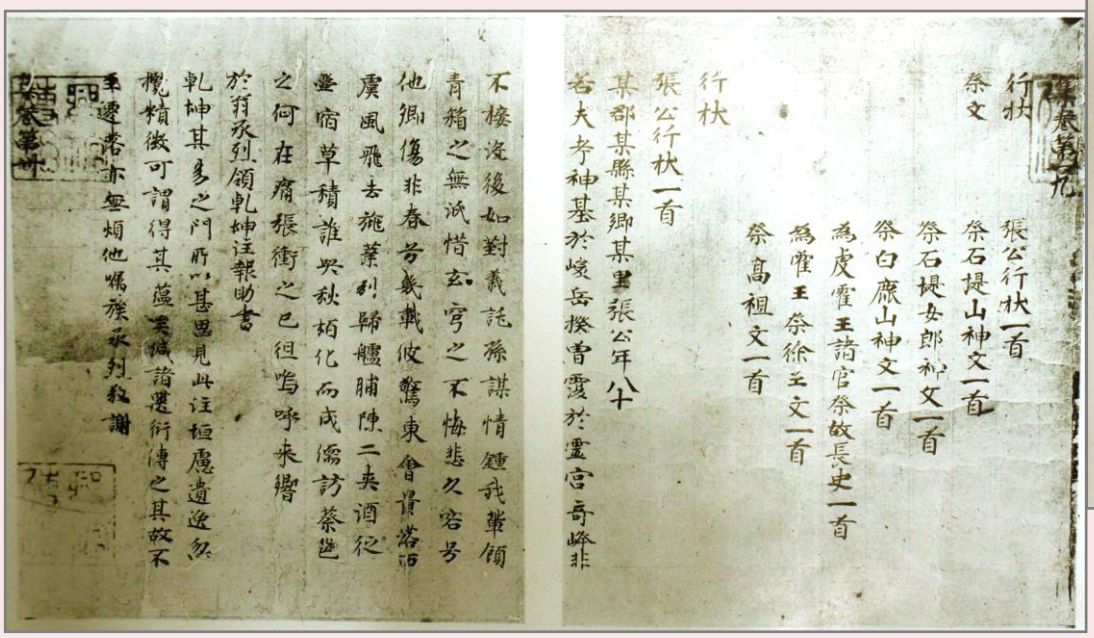
(東京書林定市会・大阪古典会、昭和 13(1938)年)

富岡文庫入札会の札元の一人・弘文荘の反町茂雄氏は、これまでの出品目録からは想像もできない、この目録について次のように著しています。

「(鹿田氏は)破天荒な豪華な目録2千部かを印刷して、札元及び全国の重立った業者に無料で進呈しました。四六倍判(今のB5判、週間誌大)、総アート紙 84 ページ。その半ば以上の 50 ページは大型の、ごく鮮明な写真版。表紙はごく厚手の上質和紙に、鉄斎先生筆の南宋画をコロタイプ刷り…その後今日まで、これに勝る典雅な古書入札目録は見た事がありません」(反町茂雄『一古書肆の思い出』第二巻)

千代田図書館所蔵「古書販売目録コレクション」【入札会－19－6394】

↓→国宝『王勃集』には写真の他に解説文も記されました。



(國寶) 紙本墨書唐王勃集　卷第二十九 第三十　一卷

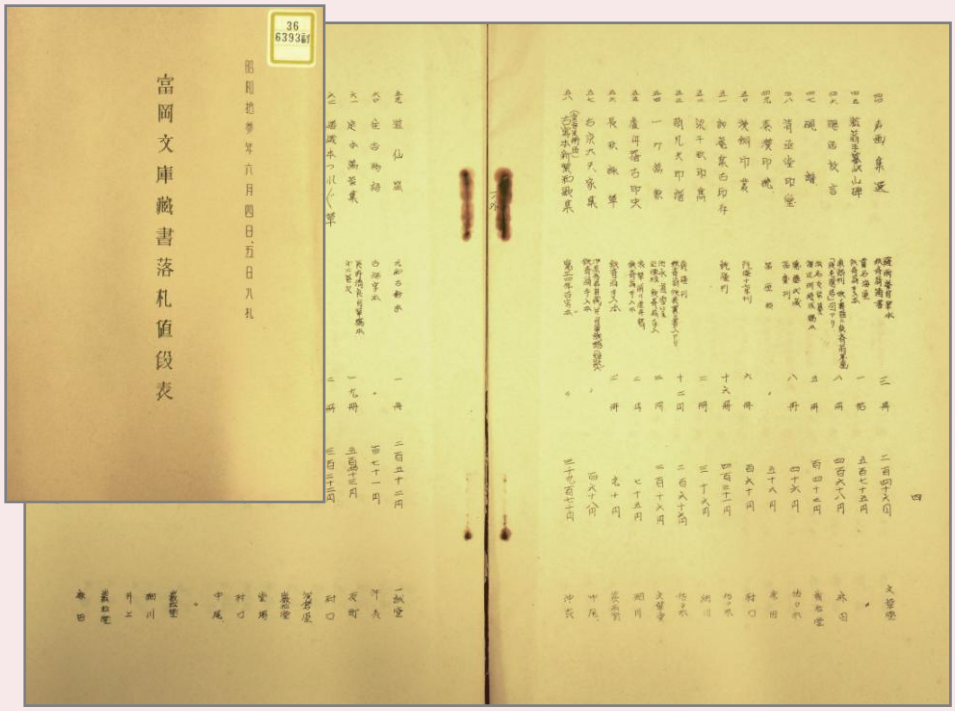
本書はもと三十卷あつたもので富岡本は卷第二十九と第三十を合せて一卷としたもので、卷第二十九は行狀一首祭文六首中五首を收めて居る、その逸存の一首は神田喜一郎氏所藏となつて居る、卷第三十は目次を佚して居るが四首を收めて居る。

これは王勃集の殿集で王勃死後の付録篇である、兩卷ともに書法は北朝風に近く則天武后の制字並に缺畫の文字等を用ひない點から見て、その鈔成は則天武后の時代を降るものではなからう。

何れも王勃集の逸篇を存じ且つ唐史の闕を補ふ史料であるのみならず、實に王勃集寫本の最古のものである、兩卷ともに「興福傳法」の印がある。

史上空前の落札記録

第1回入札会は非常に盛況で、落札総額は八万五千余円(『一古書肆の思い出』第二巻)にのぼり、史上最高額を記録しました。中でも国宝『王勃集残巻』(現東京国立博物館蔵)は、1万円を優に超える落札額の新記録。これは、昭和4(1929)年に行われた九条家入札会の落札総額に相当する額でした。



「富岡文庫蔵書落札値段表」
(東京書林定市会·大阪古典会、昭和13(1938)年)

富岡文庫入札会においては、それまでの入札会とは比べ物にならない売立であったためか、参加しなかった古書店等にも当時の落札の様子を詳細に知ることができるように、落札価格をまとめた冊子が発行されました。

千代田図書館所蔵
「古書販売目録コレクション」
【入札会－36－6393】

表1　第1回富岡文庫入札会　落札額上位10品
(目録記載品目のみ)

順位	略目No.	品　目	落札額(円)	落札者
1	1	(国宝)紙本墨書唐王勃集　1巻	14, 218	細川
2	58	(重要美術品)古写本新葉和歌集　2冊	3, 970	沖森
3	28	蕭雲従太平山水図　鉄斉先生箱書	2, 883	鹿田
4	2	(重要美術品)宋槧本新編翰苑新書後集 1冊　「椿庭」「詩仙堂」旧蔵印アリ	2, 781	文華堂
5	3	(重要美術品)永楽大典　明鈔本	2, 767	反町
6	23	古鈔本論語義疏　5冊	885	村口
7	248	韓非子翼毳	851	反町
8	92	頼山陽詩嚢(箱入)	728	中尾
9	110	万葉集　宝永板箱入　本居宣長詳細書入本	682	浅倉屋
10	12	般舟讃	669	今城

表2　第1回富岡文庫入札会
売立総額上位店舗ランキング(目録記載品目のみ)

順位	古書店	売立点数	売立総額(円)
1	**細川開益堂(京都)**	**41**	**16,291**
2	**鹿田松雲堂(大阪)**	**94**	**9,181**
3	**反町弘文荘(東京)**	**23**	**5,913**
4	文華堂書店(京都)	23	5, 255
5	沖森書店(三重)	12	4, 749
6	**村口書房(東京)**	**32**	**4,596**
7	**浅倉屋書店(東京)**	**48**	**3,715**
8	**佐々木竹苞楼(京都)**	**28**	**3,447**
9	巖松堂書店(東京)	25	2, 392
10	**文求堂書店(東京)**	**26**	**1,984**
11	**一誠堂書店(東京)**	**33**	**1,948**

※ ゴシック字は札元

2回目の入札会の落札額(7万3千余円)とあわせると、富岡文庫入札会の落札総額は15万8千円余りに達しました。これは、昭和60年代の価値になおすと約19億円に達するといいます(『一古書肆の思い出』第二巻)。

第２回入札会　―好景気は続く

第１回の好成績に勇気づけられ、翌昭和14（1939）年３月に、全く同じ方式で第２回が開催されました。今度は、下見の順序を大阪・京都・東京とし、入札会場は神田駿河台の東京図書倶楽部（今の古書会館）で行われました。

第2回の出品物は目録掲載点数 1,033 点、桃華（謙蔵）文庫本を主力として、鉄斎文庫本の若干を加えたものだったようです。前回同様に売立は大好評で、出品物の大部分は記録破りの高値がつきました。売立総額は 73,000 余円でした。

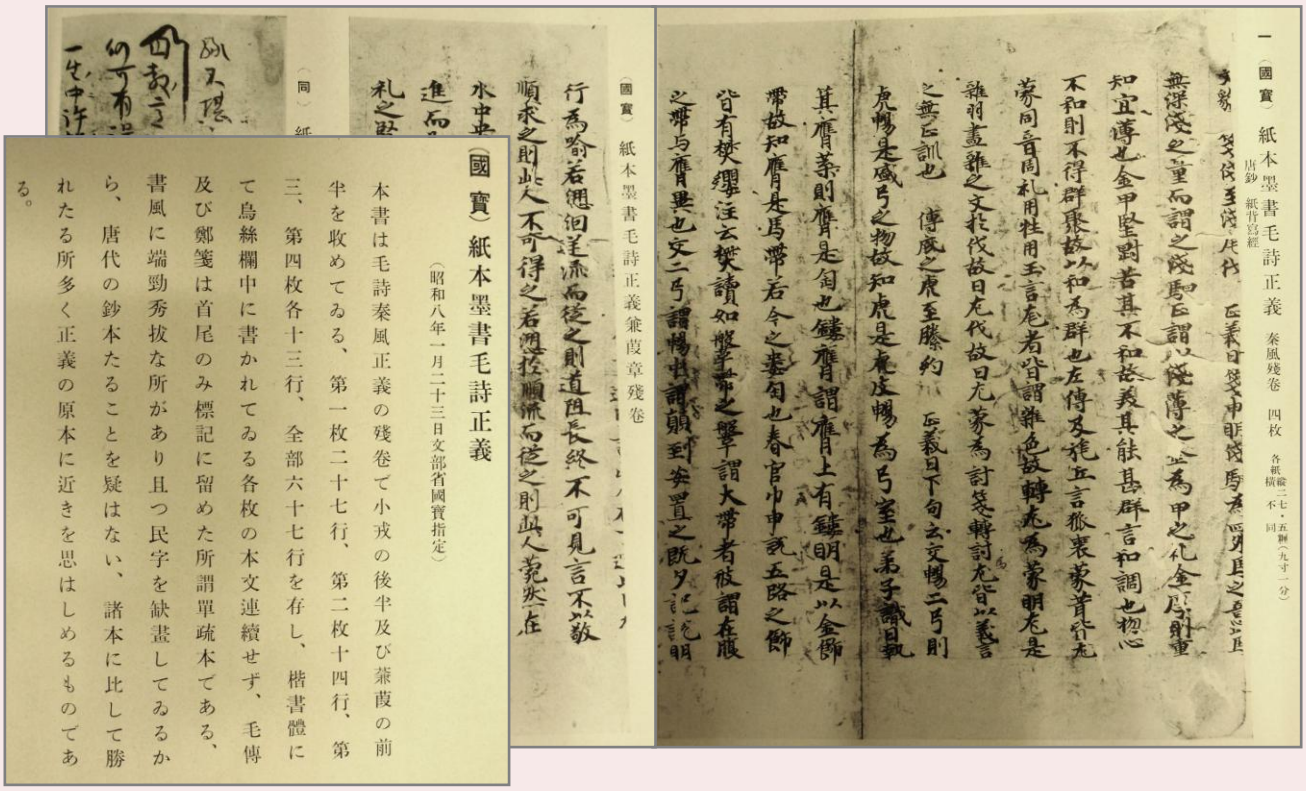
「富岡文庫御蔵書第２回入札目録」

（東京書林定市会･大阪古典会、昭和 14（1939）年）

第１回の出品目録と同じく、表紙には鉄斎筆の画が掲載されました。タイトルの右隣には鉄斎の蔵書印が印刷されており、入札会開催時から鉄斎の蔵書印や書き入れ等が注目されたことが装丁からも窺えます。

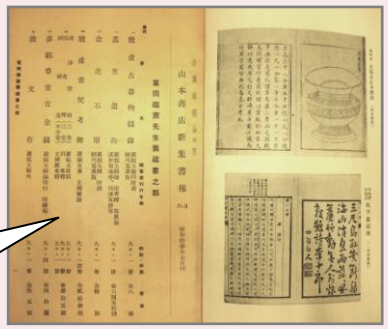
千代田図書館所蔵「古書販売目録コレクション」
【入札会－19－6396】

↓第２回富岡入札会に掲載された国宝
『紙本墨書毛詩正義』



富岡文庫の市場価値　―鉄斎の手沢本

質量ともに最高最大といわれた富岡文庫は、入札会の後、各古書店における大きな目玉商品となりました。入札会直後に発行された各古書店の販売目録を見ると、盛んに富岡文庫特集が組まれたことがうかがえます。とりわけ、鉄斎の手沢本（直接書入れをしたものや蔵書印を捺したもの）が特に貴重なものとされました。



「山本書店新集書報臨時特報　No.8」（山本書店、昭和 13（1938）年）

千代田図書館所蔵「古書販売目録コレクション」【書店別1－155－4783】

実は生前、鉄斎は自分の書き込みや蔵書印が手沢本としての価値を高めることを知っていて「こうしておけば子孫が困った時の売り代になる」と呟いていたそうです。画人であり、文人でもあった鉄斎ゆえの特色であるといえます。

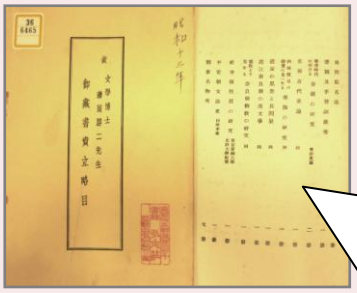
昭和十三年の入札会

昭和13（1938）年は、富岡文庫入札会以外にも大口の入札会が大変多い年でした。その中に、田安家蔵書入札会と藤岡文庫入札会があります。どちらも特色のある入札会でしたが、富岡文庫入札会と比べると、その規模が小さく感じられます。

「徳川田安家御旧蔵入札目録」（和本定市会、昭和 13（1938）年）

田安家入札会は3月18日、巌松堂が札元となって行われました。田安家は歌人、有職学の大家である田安宗武を祖とする徳川御三卿の筆頭です。出品物は目録掲載点数142点、唐本や全集、法帖等が多い中、大字古活字版『平家物語』12冊など善本類も幾つかありました。入札会の売立総額は 13,000 余円でした。

千代田図書館所蔵「古書販売目録コレクション」【入札会－36－6572】



「故文学博士藤岡勝二先生御蔵書売立略目」

（文求堂書店･玉英堂書店･郁文堂書店、昭和 13(1938)年）

藤岡文庫入札会は5月23日、文求堂･郁文堂･斎藤玉英堂が札元となって行われました。藤岡文庫は東大教授藤岡勝二博士の蔵書で、古典籍･一般古本の類 2,000 点に、博士の専門であった言語学関係の洋書が 2,000 点と非常に多いのが特色でした。洋装和書･洋書は入札会で、和唐本は和本定市会で出品され、売立総額は1万4千数百円でした。

千代田図書館所蔵「古書販売目録コレクション」【入札会－36－6465】

千代田図書館蔵「古書販売目録コレクション」のご利用について

古書販売目録コレクションは、通常は閉架書庫に保管しており、どなたでもご覧いただけます。※

検索には、図書館ホームページ内「古書販売目録検索システム」をご利用ください。詳しくは図書館職員までお問合わせください。

※一度に10点以上を閲覧する場合は事前の申請が必要です。資料の劣化や整理作業のため閲覧いただけない場合があります。

企画展示　古書販売目録にみる昭和期最大の入札会

―富岡鉄斎・謙蔵コレクション―

2011 年 3 月 28 日(月)～4 月 22 日(金)　千代田図書館 9F　ミニ展示コーナー

主催：千代田図書館　協力：二又淳氏（明治大学非常勤講師）、八木壯一氏（八木書店）

本資料は展示の内容をもとに作成しました。無断転載はご遠慮ください。